

著者略歴

土居 健郎 (どい たけお)

大正9年 東京に生まれる。

昭和17年 東京大学医学部卒業

昭和25年—27年 アメリカのメンninger精神医学校留学

昭和30年—31年 アメリカのサンフランシスコ精神分析協会留学

昭和36年—38年 アメリカ国立精神衛生研究所に招聘

昭和32年—46年 聖路加国際病院神経科医長

昭和46年—55年 東京大学医学部教授

昭和55年—57年 国際基督教大学教授

昭和58年—60年 国立精神衛生研究所所長

現在 聖路加国際病院診療顧問

医学博士

「甘え」の構造

昭和46年2月25日 初版1刷発行

平成5年3月10日 第3版3刷発行(通算155刷)

○著者 土居 健郎

発行者 鯉淵 年祐

株式会社 弘文堂

101 東京都千代田区神田駿河台1の7

TEL 03(3294)4801

振替 東京2-53909

ISBN4-335-65078-7

印刷・港北出版印刷

製本・井上製本所

Printed in Japan

第一章 「甘え」の着想

はじめにどのようにして私が甘えということを問題にするようになったかをのべたいと思う。それは一般に文化的な衝撃 (cultural shock) といわれるものを私が体験したことに関係がある。私は一九五〇年、ガリオア奨学資金を得て精神医学を学ぶべく渡米した。戦後間もなくの頃とて、私はまずアメリカの豊富な物資に目を奪われ、また明るく自由に振舞うアメリカ人に深く感心したものである。

それと同時に、私自身の考え方や感じ方がアメリカ人と異なるところからくるぎこちなさも折にふれて感ずるようになつた。例えば渡米して最初の頃だつたと思うが、日本の知人に紹介された人を訪ねてしばらく話をしていると、「あなたはお腹がすいているか、アイスクリームがあるのだが」ときかれた。私は多少腹がへつていたと思うが、初対面の相手にいきなりお腹がすいているかときかれて、すいていると答えるわけにもいかず、すいていないと返事

をした。私には多分、もう一回ぐらいすすめてくれるであろうというかすかな期待があつたのである。しかし相手は「あー、そう」といつて何の御愛想もないので、私はがっかりし、お腹がすいていると答えればよかつたと内心くやしく思つたことを記憶している。そしてもし相手が日本人ならば、大体初対面の人にぶしつけにお腹がすいているかなどときくことはせず、何かあるものを出してもてなしてくれるのにと考えたことであつた。

それからこれも比較的早い頃であつたと思うが、ある日私を指導する立場にいた精神科医が私に何か親切なことをしてくれた。それが何だつたかはもう忘れてしまつたが、ともかく極く些細なことだつたと思う。ともかく私はお礼をいう必要を感じたが、なぜかサンキューという言葉がすぐ口に出ず、思わず "I am sorry." といつた。すると彼が怪訝な顔をして "What are you sorry for?" と聞き返してきたのですつかり面喰つてしまつた。私がサンキューといえなかつたのは、それでは田上である相手に対しあまりに対等な口のきき方であると感じたからだと思う。私は日本語なら「どうもありがとうございます」または「どうもすみません」といいたかつたにちがいない。しかし英語でその気持が表現できず、それで "I am sorry." が口を突いて出てきたのである。もちろんこんないい方をしたのは私の英語力が当時まだかなり不足していたことが原因していただろう。しかし私は、自分の直面してい

る困難が単なる語学的な障壁に留まらないことを当時すでにうすうすと感じ始めていたのである。

また次のようなことも私の神経を刺戟したことであつた。アメリカ人の家庭に食事に呼ばると、まず主人が酒かソフト・ドリンクいずれを飲むかとたずねてくる。そこで、酒と所望したとすると、次にはスコッチかブルボンかときいてくる。そのどちらかにきめた後、今度はそれをどうやつてどのくらい飲むかについても指示しなければならない。さいわい主な御馳走は出されたものを食べればよいのだが、それがすむと今度はコーヒーか紅茶かをきめねばならないし、それも砂糖を入れるのか、ミルクはどうするか一々希望をのべねばならない。私はこれがアメリカ人の丁重なもてなし方であるということはすぐにわかつた。しかし内心ではどうだつていいじやないかという気がしきりにした。アメリカ人は何と小さなことで一々選択しなければならないのか、あたかもそうすることによつて自分が自由であることを確かめでもするかのように、こんな風にも私は考えた。これはもちろん私がアメリカ人との社交に馴れないことからきた戸惑いであつたであろう。したがつてこれはアメリカ人の習慣であるとわりきつてしまえばそれですむことであつたのかもしれない。それに日本人の場合だつて客の嗜好をきくことが全くないわけでもない。しかし日本人だつたらよほど親しく

なければ、お好きですかと客にきくことはないのでなかろうか。むしろそれほど親しくない客には、お口に合わないかもしませんが、といつて食べ物をさし出すのが日本人の習慣ではなかろうか。それにひきかえアメリカ人は主な御馳走については有無をいわせず、時にはどうやつてつくったか得々とのべながら目の前につき出すのに、その前後の飲み物については客の選択の自由をゆるす。これが私にはとても奇妙に思われたのである。

」のことと関連して、アメリカ人がよく使う“Please help yourself.”という挨拶も、英語の会話に馴れるまでは、私の耳にあまり快くは響かなかつたことをのべておこう。この言葉は日本語だと「自由にお取り下さい」「自由にお召し上り下さい」というほどの意味だが、直訳すると「どうぞ御自身を助けなさい」ということになる。これはどうも私の耳には何か突き放したようで不親切に響き、それがなぜ好意の表現となるのか、なかなか悟れなかつた。日本人の感受性からすると、主人は客をもてなすに際し、かゆい所に手が届くように相手の気持を察して助けてやるのが礼儀である。したがつて「御自分を助けなさい」では不馴れた客に対しあまりにも思いやりのない言葉と思われないか。私は概してアメリカ人は、日本人のように思いやつたり察したりすることをしない國民であるということを漸く感じるようになつた。そんなわけで、そうでなくとも異郷にあれば心細くなるものだが、私は一層心細い

気持で最初のアメリカ生活を送っていたのである。

このような時、たまたま知りあつたあるアメリカ婦人が、ルース・ベネディクトの「菊と刀」⁽¹⁾を貸してくれた。私は早速それを読んだが、その際自分の姿がそこに映し出されているような感じがしきりとしたことを憶えている。ページをめくりながら、なるほどそうなのかと何度もうなずいたものである。この本はまた、なぜ日本人とアメリカ人の心理がかくも違うかという点についても、私の知的好奇心をかきたてた。滞米中、以上のべたごとき体験を持ったからであろう。私は一九五二年に帰国したが、その後私自身の眼と耳で日本人の日本人たる所以を明らかにしたいと思うようになつた。したがつて患者を見る場合も、アメリカ人の患者とどこが違うのかを絶えず考えた。そのため私は、彼らがどういう言葉で自分の状態を訴えるかに注目し、またそれをどう記載することが日本語として正確かという点に心を碎いた。このことは精神科医として当然なことと思われるかもしれないが、実は当然ではなかつたのである。というのは従来日本の医者は、患者の話を聞いてその要点を限られた数のドイツ語で記載することが習慣になつていたからである。ドイツ語としては極く日常的な語も、日本の医者の手にかかるとほとんど学術用語同然の扱いを受けた。またドイツ語にならぬものは当然切つて棄てられねばならなかつた。このような傾向は実は精神医学に限ら

ず、他の専門分野にも見られ、私は常々それを奇異なことに思っていたのであるが、アメリカに渡つて彼の国の精神科医が自国の言葉で患者のいうところを記載し、また自国の言葉で患者の病理について考察を進めているのを見て、こうでなくちゃいけないと思った。したがつて私も日本人の患者を見る以上は、日本語で記載し、日本語で物を考えるようにしようと、かたく決心したのである。

このようなことを実践しているうちに、私は次第に、もし日本人の心理に特異的なものがあるとするならば、それは日本語の特異性と密接な関係があるにちがいない、と考えるようになった。私はたまたま一九五四年、東京で開催された米軍軍医たちの精神医学会において、日本の精神医学についての概観をのべるよう求められたが、その講演⁽²⁾の終りの方で大体次のような趣旨のことをのべた。日本人心理の特異性を投影法の心理テストを用いて明らかにしようと試みがあるが、それによつて何らかの結論が得られるとしても、しかしその方法で最も日本的な特色がつかまえられるとは思われない。なぜならもともと欧米人を基準にして作られた心理テストによつて測られるような日本的特色は、結局欧米人の立場から見たそれであつて、この立場を超えるものはそれによつては得られないからである。「ある国民の特性はその国語に習熟することによつてのみ学ぶことができよう。国語はその国の魂に内在

するすべてを含んでおり、それ故にそれぞれの国にとつて最上の投影法なのである。」

私が以上の講演を行なつた時、「甘える」という言葉に含蓄される独特の意味についてどれほど気付いていたか、今でははつきりとした記憶が残っていない。しかし多くの患者の観察を通してこの頃漸く何かが私の頭の中で醸酵しつつあつたことは疑いないところである。私は当時東京大学医学部の精神医学教室にいたが、ある日教室主任の内村祐之教授と座談して「甘える」という言葉はどうも日本語独特のものらしい、とのべたことを憶えている。教授はそれをきいて頭をかしげながら、「そうかね、君。子犬だって甘えるよ。」といわれたようだ。教授のいわんとされたことは、人間にとつて、さらに動物までも含めてかくも普遍的な現象を記述する言葉が、日本語にあつて外国語にはないなどということは考えられないではないか、という意味であつたのであるが、私はまさにそれ故にこの事実は重大であると考へた。そして日本人心理の特性はこの事実と深い関係があるにちがいない、とひそかに確信を深めるに至つたのである。//